

30285

✓

教科書文庫

3
810
32-1897
01304 49296

M30  
1897

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

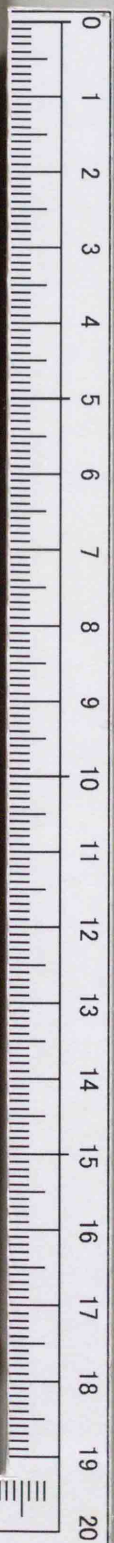
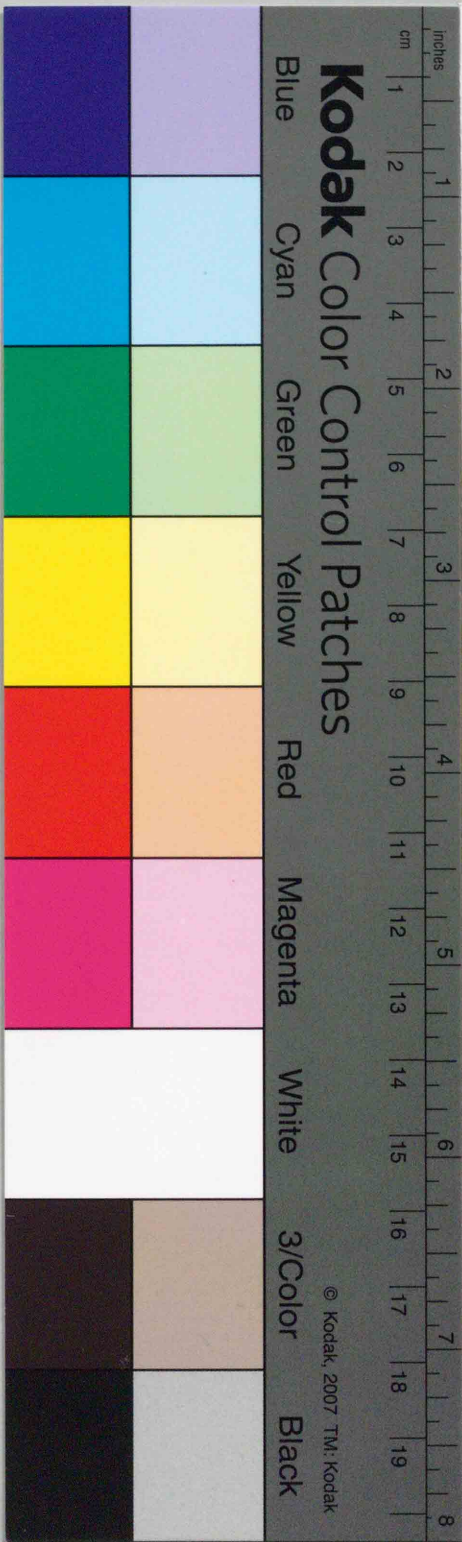


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Shil4  
資料室

子女  
日本讀本

新保磐次著  
上篇第二

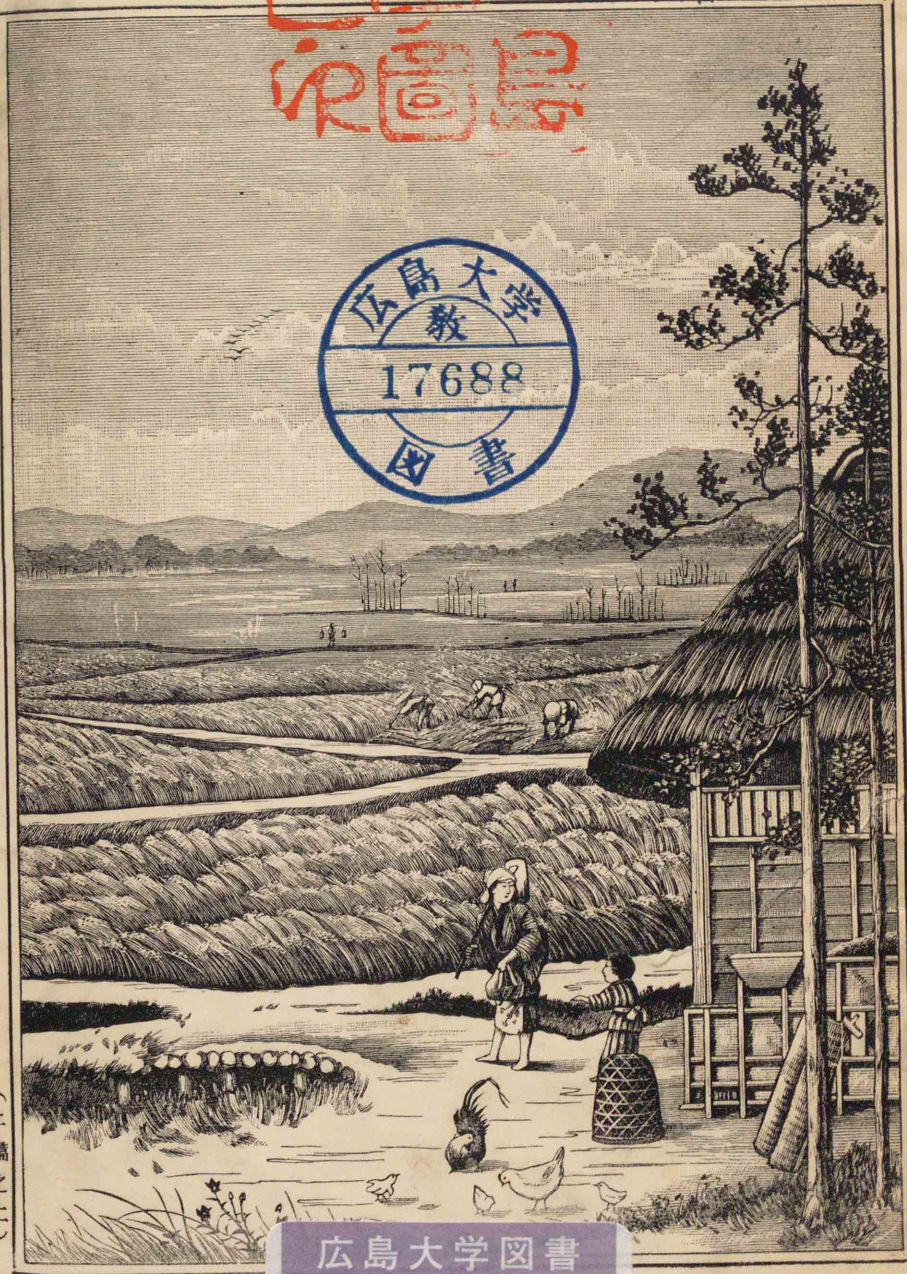


資料室

3789  
ShiLP

書大廣  
中央図書館  
印圖書

広島大学  
教  
17688  
圖書



(上篇之二)

広島大学図書

0130449296



子女  
日本讀本。上篇。第二。目次。

六  
七  
つ  
た  
ま  
よ

- 田舎。 官崎安貞—農業全書。
- 鋤芸。 眠りの時間。
- 朝寝。 貝原益軒—大和俗訓、節略。
- 菌。
- 稻荷山。
- 菊。
- よめに教訓の文。
- 陶器。
- 奈良。
- 大根、蕪。
- 食用の鳥類。
- いと女。 伴蒿頭—近世町人傳。

二十 十八 十五 十四 十一 十八 六 五 四 三 二 一

女  
上篇第二

新年。

鳥の智。

卵。

瞳。

猫の類。

義猫。源峯雄一鳥獸孝義傳。

鈴木宇右衛門の一家。

梅。

梟。

みみづくの文。室鳩巢一駿臺雜語。

書札文字の死活。菅茶山一筆のすまじ。

其の獨を慎む。

梟と鳩との話。

二十一

二十三

二十四

二十六

二十七

二十九

三十

三十一

三十四

三十六

三十七

三十八

三十九



子女日本讀本 上篇 第二。

田舎。

是れは田舎の農家なり。田舎の家は大抵低くして、二階ある者寡し。然るに都會には二階造り最多く、或は三階あり、稀には五階あり。都鄙の差ひかくの如きは何故ぞや。都會は人數に割り合ひて土地狭く、加ふるに繁昌の處は地價貴きが故に、務めて手狭なる地面に家を建て、之を二階、三階にして室の數を多くし、地面を儉約するなり。加之都會は家家立

ち込みて外を見晴らすこと能はざる故、其の家を高  
くして四方を眺めんとすることあり。田舎は之と  
事替はり、地面は廣く、人口は寡く、地價は高からず、人  
家は立ち込まず、故に二階、三階を要すること少し。  
時は秋の半にして風をよむ稲穂は人を招きて  
早く刈り入れよと催促するが如し。父は野に在り  
て仕事しつつあるならん、母は晝飯を運びて今正に  
往かんせり。

吾れ等は田舎の住居を好む。若草萌ゆる春の野、  
風に浪打つ夏の畠、黄金色なる秋の田、梨の林、葡萄の

棚、涼しき泉、清き流れ、勇み進める駒の聲、質朴なる農  
夫の性、誰れか之を愛せざらん。都會の賑はしさを  
のみ慕ふは愚かなり。

世に農夫はを幸なるはあらじ。新しき空氣を呼  
吸すること農夫の如きありや。清き水を飲むこと  
農夫の如きありや。運動多くして心勞少きこと農  
夫の如きありや。健康、長命にして善く食すること  
農夫の如きありや。

農夫は毎朝早く起きて野に働く。日光は先農夫  
の頭を照らし、朝風は最新しき空氣を送る。草木の

露は旭に映じ、鳥の聲は喜びて人を迎ふるに似たり。一日の中の最好き風景は唯、農夫の耳目に入る。農業は職業の中に最健全幸福なるものの一つなり。

鋤芸

既ニ種子ヲ蒔キ、苗ヲ植エテ後、農人ノ務メハ、田畑ノ草ヲ去リテ其ノ根ヲ絶ツベシ。根莠トテ苗ニヨク似タル草アリ、此ノ草ハ苗ニ先立チテ茂リ榮エ、輒時モ去ラザレバ程ナク蔓リテ土地ノ氣ヲ奪ヒ竊ム故、苗ヲ妨グル事限リナシ、油斷ナク取り去ルベシ。

譬へバ草ハ主人ノ如シ、元ヨリ其ノ所ニアリ來ル者ナリ、苗ハ客人ノ如ク脇ヨリノ入り人ナリ。サレバ草ハ大方ノカヲ用ヒテモ盡ク除キ去リガクシ。其ノ上善キ物ノ育チ難ク、惡シキ物ノ榮エ易キハ、世上尋常ノ事ナレバ、草ノ榮エテ五穀等ヲ害スルハ甚速カナルモノナリ。此ノ故ニ上ノ農人ハ草ノ未目ニ見エサルニ中打チシ芸リ、中ノ農人ハ見エテ後芸ルナリ。見エテ後モ芸ラサルヲ下ノ農人トス、是レ土地ノ罪人ナリ。

官時安貞——農業全書。

### 眠りの時間。

大凡大人の眠りは六時間より八時間を度とす。老人は六時間眠り得ぬもあり、少年は九時間十時間眠りても差支へなきことあり、幼兒に至りては晝夜の過半を皆眠りに費せり。

若き間は善く眠るものなれば、成るべく早く寐ねて早く起くべし、夜ふかし朝寐をすべからず。朝の空氣は清潔なれば、早く起きて外に出で、深き呼吸をなして胸の中の空氣を入れ替ふるは、最養生に宜し。

「一日の計は早朝にあり」。早く起きて仕事を始むれば、思ふ如くに捗取りて、一一順序整ひ出来は、亦宜し。加之朝飯早ければ、消化の時間、胃の休息の時間十分ありて、晝飯の消化亦宜しく、隨て夕飯亦消化宜し。之に反して遅く起くる人は一日仕事に追はれて三飯皆旨からず、不愉快にのみ日を送るべし。

一家を治むる人は、猶更自ら早く起きて臺所を整へ、又は召し使ひのものを起こすべし。自ら朝寐して臺所の不手廻りを怒るべからず。古へより名高き賢人、長命の人なぞの傳を讀めば、何れも皆朝起き

の習はしある人たちなり。

### 朝 寝。

古人ハ人ノ朝早ク起クルト晏ク起クルトヲ以テ家ノ興廢ヲ知ルト云ヘリ。朝早ク起クルハ家ノ榮ユルシルシナリ、晏ク起クルハ家ノ衰フル基ナリ。朝夙ニ起キテ事ヲ勉ムルヲ以テ身ノ習ハシトシ、家ノ務メノ則トスベシ。朝寝スルハ怠リノ始メ、貧窮ノ基ナリ。ヨク事ヲ勉ムル者ハ一日ヲ以テ十日トス、勉メテ怠リナク敏ナレバハカユク故ナリ。怠ル

者ハ十日ヲ以テ一日トス、日數多ク經ルト雖ハカユカズ。凡善ヲ勉メテ怠ラザルヲ良士トス、必家ヲ興ス、家業ヲ勉メテ怠ラザルヲ良民トス、必富ム。

貝原益軒——大和俗訓。節略。

### 菌。

菌は朽ちたる植物に生ず。松茸、サマツは松林に生じ、椎茸は椎の木に生じ、其の他初茸、シメヂ等あり、皆食用とすべし。

是れ等の茸は皆莖の上に笠を戴けり、初めは笠開かずして球の如く、數日の後には開きて傘の如し。

筮の未開かざるもの最食料に宜し。さて又筮茸の形ちは木の枝の如く、きくらげの形ちは人の耳に似たり、是れ等は皆食ふべき者なり。其の他形ちの異なる者、毒ある者共に寡からず。見馴れぬ菌を食ひて其の毒に中たり、はかなく命を落とすもの往往あり、異株の菌は妄りに食ふべからず。

椎茸、松茸は香ひ、味ひ共に宜しくして上等の料理に用ひらる。乾かしたる椎茸は風味却りて生なる者に勝さり、且貯へ置くに便利なる故、要用甚多し。然るに天然の椎茸は至りて寡きが故に、人工にて椎

又は楢の丸太にシロミツ等を注ぎて之を生せしむ。西洋にては菌を育つる術大に進み、多量に之を製し乾かし貯へて諸方に出だす。

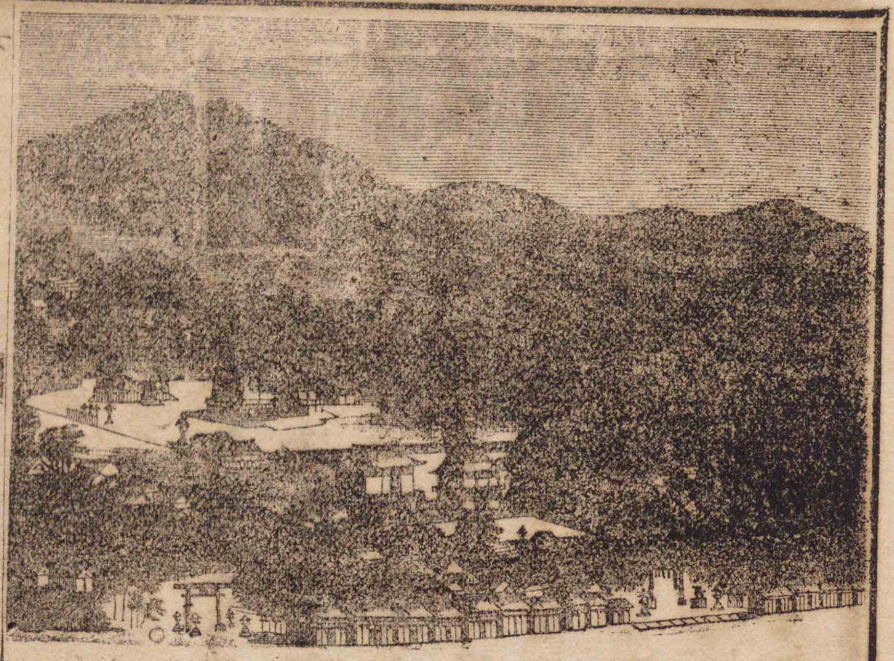
菌は種類多く、産地廣しと雖、世に名あるは京都の稻荷山の松茸なり。職業の暇に家族相誘へて秋山に遊び、草を敷きて裯とし、落葉を集めて薪とし、自ら取りたる松茸を炙りて食ふは最興あることなり。春の蕨折りと秋の茸狩りとは山家一年中の最樂しき遊びなり。



### 稻荷山。

稻荷山は京都の南口にありて稻荷神社其の山本に鎮座せり。古へより紅葉の名所にして歌に詠せられ、文に記されたること多し。

東海道の瀧車に乗りて京都に入るに車の停まること漸く繁く、大谷と呼び、山科と呼び、一步毎に山水の優しく美しきを覺ゆ。既にして又一の停車場に至れば山の緑滴るが如く、朱塗りの樓門正面に見に、車丁の呼ぶを待たずして稻荷の停車場なるを知る。



車を下りて門内に入れば、境内清潔にして白石を甃めるが如く、本社拜殿を初めて多くの末社兩傍に鎮座し、美しく貴きこと言語に盡し難し。末社に荷田東麻呂の社あり。東麻呂は稻荷神社の祠官にして百五十年前の人なり。八

女  
上  
七  
全  
止

行日不詩才 一編 二 金澤學書院藏

歳の時父に従ひて小鳥狩りに行き。

稻荷山

今日は小鳥のねを絶えて

音するものは谷川の水。

と詠みし人なり。長じて和歌の道に精しく、又日本古代の歌文を調へて其の讀み難く解し難き者を説き明かしければ、後世此の人を日本古學の祖と貴へり。朝廷亦其の功を賞し給ひて荷田神社の號を賜へり。

菊。

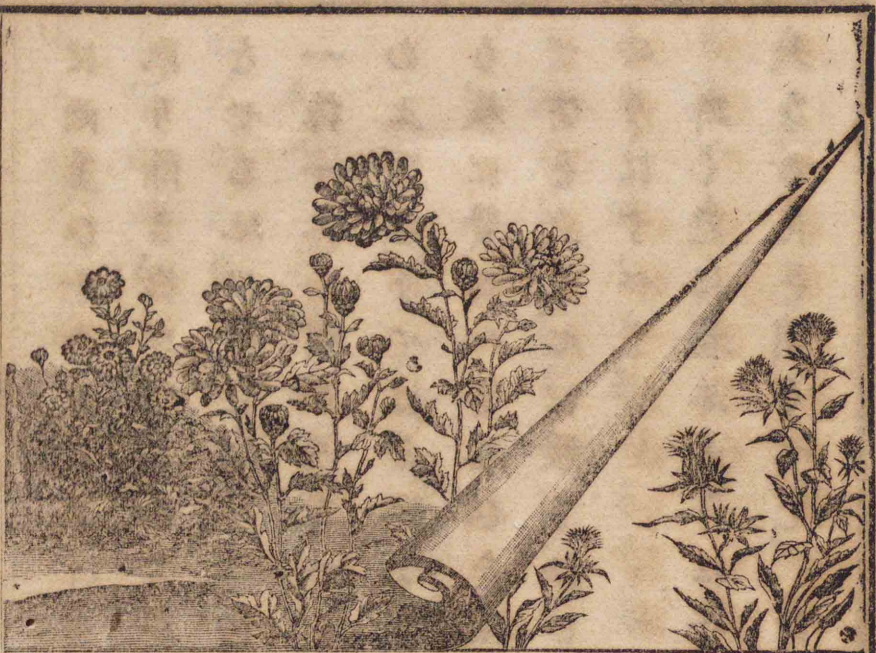
菊には夏菊、秋菊、寒菊あれど、秋菊最多くして且美しきが故、菊の季節を通例秋とするなり。誰れも見知る如く、此の花の形ちは一種異なるものにして數十の花弁を八方に出だせり。色は黄菊、白菊を重なるものとし、赤、薄紅等色々あり。

紅花即へ二の花及びタンポポの花などは形ち皆菊の花に似たり。植物學者は是れ等を菊の一類となし菊科植物と名づけたり、さて細かに穿鑿すれば

女用本讀 二篇 第二 八

其の花の一輪は實は一つの花に非ず、花瓣各一つの花を成せる者なれば、學者は之を聚合花又は複花と名づく。

菊は生活の力の強き草にして、其の一葉を缺き取りて土に挿すも、遂に根を生じて花を開くに至ることあり。故に菊は人の力を假らずして春毎に古根より芽を出だし、秋に至りて花を開くこと年年に絶えず。然れども美しき花を眺めんには、隨分養育の手敷を盡くさざるべからず。料理菊とて花瓣を食用にするものも亦相當の養育を要すること勿論なり。



菊を育てて真に名花を得んには種種細かなる法あれども、今誰れにても行ひ得べき一通りの法を話さん。花終はらば莖を刈り取りて根に霜除けをなし、別に一つの地を深く掘り返して十分に肥料を入れ、之

に雨蓋カサひをなして來年を待ち、春に至らば霜除けを  
取り除き、彼岸頃其の若芽を分かちて、前に雨蓋ひを  
なせる地に移し植うべし、之を根分けと云ふ。其の  
一株一株の間は成るべく遠きを善しとす。さて夏  
の土用頃までは葉脇より出づる芽を務めて取り取  
り、枝に費ツひへき養ひを莖カサに集むべし。又莖カサに添へ  
て竹を立て、之に緩く結び付けて莖カサの折れず曲らぬ  
やうにすべし。

斯く懸に養ふときは十一月頃に至りて美しく  
大なる花を開くべし。白きは雪の如く、黄なるは黄

金の如く、其の他玉の如きもの、錦の如きもの、實に目  
もあやなる眺めなり。唯其の美しく、賑にぎはしきのみ  
ならず、時しも秋の末なるに、此の花獨ひと霜を凌しのぎて咲  
き誇ほるが珍めづしく嬉うれしきなり。

よめに教訓の文。

幼少の者利發仕候とて立ち木の儘ままに育て候はば  
成人の後氣隨ま我が儘ままに相成り、多くは親の申す事を  
も聞かぬものにて候。親の申す事さへ聞かぬ様ように  
成り候ては召し使ひの者の申す事は猶なほ以ての事に

候。左候へば後に國郡を治むる事はさて置き、我が身も立ち申さぬ様になり申候。

一體幼年の節は直なるものに候まま、いかやうに究屈に育て候ても最初より仕付け次第にて外より存ずるほそは太儀にもなく候。これを植ゑ木に譬へ候へば、初め二葉にかひ割り候節人の産出と同一事故、随分養育いたし、もはや一二年も立ち、枝葉多くなり候節添へ木いたし、直になり候様に結び立て、其のうちに惡しき枝は取り、年年右の通り手入れいたし候へば、成木の後直なる植ゑ木になり申候。

人も其の通り、四五歳より添へ木の人を附け置き候て、惡しき枝を抜き、我が儘に育たぬ様に致し候と、後直によき人になり申候。幼少の時は育てさへいたさばよきと心得、我が儘にいたし置き、年頃になり急に意見いたし候ても、我が儘の惡しき枝計り浅り、本心本木は失ひ候事故直り不申候。

陶器。

陶器ハ吾ガ國第一等ノ産物ニシテ生絲、塗り物等ト共ニ多ク西洋ニ輸出セラル。殊ニ國人ノ日用品

トシテ一日モ缺クベカラサル物ナル故、製造甚盛ナリ。其ノ製方ハ處ニヨリ品等ニヨリテ違ヒアレドモ、今左ニ上等陶器ノ製方ノ大略ヲ説カン。

陶器ヲ作ルニハマツ上等ノ粘土ヲ細カニ碎キ、水ニテ煉リテ好ム所ノ形キニ作り、之ヲ竈ニ入レテ燒キ固ムルナリ。然レドモ粘土ノミニテハ燒カレテ後甚シク縮マリテ形キヲ失フ故、必白砂ノ如キ者ヲ加フルナリ。サテ粘土ト砂トノ如キ者ノミニテハ粘着セズシテ崩レ易キ故、又長石ノ類ヲ加フ、コレハ熱ノ爲ニ熔ケテ鉛ノ如クがらすノ如クナリテ、粘土ト

砂トノツナギヲナス者ナリ。此ノ三種ノ者ヲ混ジテ竈ノ中ニ燒キ固メタル者ハ即素燒キニシテ、茶碗、徳利等ノ底ニ顯ハレタル粗糙ノ面ナリ。

素燒キハ粗糙ニシテ取り扱ヒニ快カラズ、汚レヲ留メ易ク、殊ニ液體ヲ吸收スルノ不便アル故、之ニウはぐすり即釉藥ヲ掛ケテ後初メテ完全ナル陶器トナル。釉藥モ大凡素燒キノ物質ト同一ナルヲ善シトスレドモ唯長石類ノ分量ヲ多クシテ熱ニ熔ケ易カラシメ、隨テがらすノ如ク滑カナラシムルヲ專一トス。扱釉藥ノ混合程好キ者ヲ水ニテ煉リテ素燒

女  
二  
三  
十

キノ面ニ塗り、更ニ之ヲ竈ニ入レテ焼ケバ釉藥熔ケテ表面全ク滑カニ、且液體ヲ吸收セザル完全ノ陶器トナルナリ。

陶器ニハ大抵彩色ヲ以テ山水花鳥等ヲ畫ケリ。之ヲセンニハ素焼キノ面ニ色料ヲ以テ畫キ、然シテ後ニ釉藥ヲ塗ルナリ。色料ノ最多ク用ヒラルルハ青色ニシテ次ギハ赤色ナルベシ。青色ノ色料ハヒサト云フ者ニシテ赤色料ハ通常ハベニがらナリ。極メテ遠キ昔ニハ陶器ノ製甚粗末ニシテ今ノ瓦、焙烙ノ質ノ如ク、陶器ト云ハズシテ土器ト云フベキ

者ナリキ。其ノ後陶器ノ製造始マリキト雖、釉藥ヲ掛ケタル者ハ久シク出來ザリシガ、一千年前行基菩薩ト云フ僧初メテ釉藥ヲ掛クルコトヲ教ヘタリ。其ノ頃ハ奈良ノ朝トテ大和ノ奈良ニ皇居アリシ時ナリ。

其レヨリ五百年ヲ經テ賴朝ノ稍後ニ加藤四郎左衛門景正ト云フ人尾張ノ瀬戸ニ陶器ノ業ヲ起コシ、且支那ニ行キテ其ノ業ヲ研究シテ歸レリ。又四百年計リヲ經テ足利將軍ノ時陶器師祥瑞シロキ五郎大夫支那ヨリ歸リテ肥前ノ唐津ニ業ヲ開ケリ。其ノ後豊

臣氏朝鮮ヲ征伐セシ時肥前ノ鍋嶋氏薩摩ノ嶋津氏  
良工ヲ擒ニシテ歸リ各其ノ領地ニ此ノ業ヲ開カシ  
メキ。斯クテ日本陶器ノ精巧却テ支那朝鮮ニ勝リ  
世界第一等ト稱セララルニ至レリ。

日本陶器ノ產地ニシテ最有名ナルハ肥前ノ伊萬  
里尾張ノ瀬戸加賀ノ九谷薩摩京都等トス。備前美  
濃會津伊勢ノ萬古等亦有名ナレドモ其ノ質稍劣レ  
リ。就中瀬戸ハ景正ガ業ヲ創メシヨリ大凡七百年  
吾ガ國陶器業ノ最舊キ地ナルガ上ニ其ノ製品ハ白  
ク堅ク價亦安クシテ最一般ノ使用ニ適セリ陶器ノ

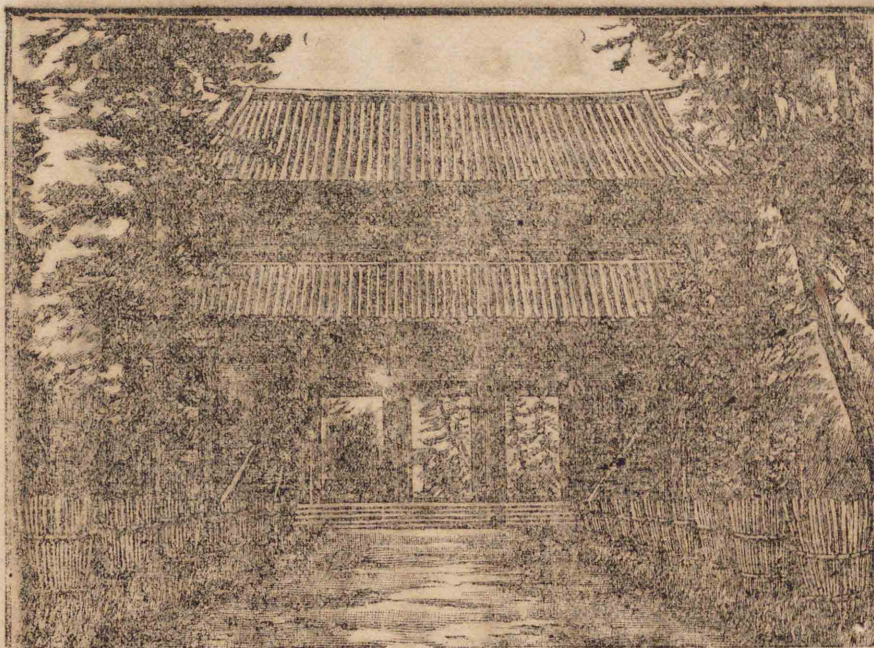
總名トシテ瀬戸物ノ名ヲ得タルモ誠ニ故アルナリ。

### 奈良

奈良は大和の國添上郡にありて、一千餘年前桓武  
天皇山城の京都に遷り給ひし時まで七代七十年間  
の都なりき。舊都の地は今の數倍にして奈良より  
五十町を隔てたる添下郡郡山の町に及へり。

されば今の奈良は僅に舊都の東北の隅なる一部  
分なりと雖、さすがに市街繁昌し、奈良縣廳もここに  
あり。春日山、三笠山、若草山、手向山等の小山連なり





て東北に立ち、三笠山の麓には春日大社あり。境内甚廣くして、森森たる古木は朱の玉垣と相映じ、「春日形」の燈籠道はたに列なること幾百と云ふことを知らず。又數多の鹿ありて境内に畜はれたるが、よく人に馴れて食を求め、子鹿は

殊に活潑にして何處と云はず跳び歩く様最をかし。春日神社を距ること數町にして東大寺あり。當寺の大佛は所謂「奈良の大佛」にして、聖武天皇の建立し給ひし大巨の銅像なり。像の高さ五丈、後光の高さ八丈、堂の高さ十五丈なりと云ふ。堂は屢兵火に燒かれて改め造れる者なれど、南大門は奈良の都の時のままにして、千年の今に至るまで堅牢莊嚴なること驚くに堪へたり。

其の他興福寺、西大寺等所謂「七大寺」には有名なる建築、彫像多く、之を巡拜する者は奈良の朝の藝術盛

子 日 樹 譜 本 上 篇 第 二 金 澤 堂 書 齋 林 云 會 社

にして且巧みなりしことを知るべし。又古代の宮殿の趾、天皇、皇后の御陵の多きこと數ふるに違あらず。或は奈良の都の八重櫻と云ひ或は藤澤池と云ふ、凡是れ等の名所舊蹟を委しく尋ねたらんには、數週日を費やすに至るべし。

奈良の産物として世に知られたる者は奈良晒、奈良團扇、奈良人形、鹿角細工、奈良漬、墨等なり。奈良人形は春日大社の古き材木を以て作るを云へり。

### 大 根 蕪。

大根は字の如く大なる根なり。色白く、太く長くして地の中に生長し、葉は大根の頂きなる極めて短き莖より引き出で、其の形ち人のよく知る所なり。夏大根、冬大根を云ひて四時共にあれども、冬季採納するもの最好し。

大根の大なるもの亦冬大根を第一とす。最大なるは尾張の宮重、大隅の櫻嶋大根にして、大きき人の頭の如し。大根は寒國にもよく生長し、渡嶋の龜田に作るもの宮重櫻嶋の産に劣らず。されば何れの地にも多く用ひられて、臺所に此の物を見ざる處な

女 大 根 蕪 上 篇 第 二 十六 大 根 蕪 上 篇 第 二 十六

し。  
大根は生にておろして薬味とし、剉みてしんし又  
は干し剉みて醤油と酢とにて食ふ。然れども大根の  
最多く用ひらるるは煮物と漬け物とにして、殊に漬け  
物は四時膳に上りて、如何なる美味珍膳も之を缺け  
ば體裁を成さざるなり。

大根を漬くる法種種あり。大根を薄く剉みて鹽  
にてよく揉み、直ちに食ふものを大坂漬けと云ふ。  
糠味漬けは鹽と米糠とを交じへたるものの中に漬  
け置き、兩三日にして食ふものなり。淺漬けは冬の

初めに稍乾かしたる大根を鹽と麴と米糠とにて漬け  
二十日程を経て食ふものなり。是れ等は何れも長  
く貯ふべからず。長く貯ふべきものは澤菴漬けと  
て、よく干したる大根を鹽と米糠とにて漬け、重き押し  
石を掛け、數十日の後に食ふものなり。鹽の強き程長  
く貯へ得べし。こは三百年前の名僧澤菴和尚の教  
へたる法なりと云ふ。

或人曰はく「吾れ東西諸國の澤菴漬けを食ひ試み  
るに伊豆の熱海の品に及ぶものなし。熱海は寒中  
天氣甚善く、大根の乾くこと十二分なり、さて米糠は

半年餘り貯へ置き、時時蟲のそちたる處を拾ひ去り、  
 蟲の既に生ぜざる時に至りて後に漬く。故に鹽の  
 甚少きも腐敗することなく、甘美にして長く貯ふべ  
 し。こは主として熱海の氣候のわざなるべけれど、  
 此の手心を知る時は大に加減の心得となるべし。」  
 大根の一族にして最相似たるは蕪なり。蕪は大  
 根の如く縦に長からずして横に平たし、煮又は漬け  
 て食へば味甚宜し。近江蕪は直徑四五寸にして、根  
 の末に細き尾あり、近江の大津の名産なり。天王寺  
 蕪は直徑七八寸に至り、尾なくして鬚あり、攝津の天

王寺より出づ。小蕪は小けれども味却て大いなる  
 ものに勝れり。

大根、蕪は根も葉も共に食ふべくして根を主とす  
 るものなり。此の一族にして根は甚小さく唯葉の  
 み食はるるものは菜の各種なり。すべて此の族の  
 花は瓣四枚にして十字の形ちを成す、故に植物學者  
 は之を十字科植物と稱す。

食用ノ鳥類。

吾ガ國ノ昔ハ野鳥ヲノミ食ヒテ、飼ヒ鳥ヲバ食ハ

又風俗ナリシガ、近頃ハ雞ヲ多ク食フヤウニナリヌ。  
 雞ハ何レノ地ニモ飼ハルル鳥ニシテ脊ノ高サ一  
 尺ヨリ二尺ニ至リ、色ハ種種アレドモ、黒キモノ最多  
 ク、嘴短クシテ末稍曲リ、飛ビ翔ルコト甚拙シ。雄鳥  
 ニハ美シク赤キ雞冠アリ、尾ハ長クシテ曲リ垂ルル  
 コト虹ノ如シ。雄鳥ハ聲高ク長クシテ能ク時ヲ告  
 ゲ、雌鳥ハ能ク卵ヲ生ムヲ以テ昔ヨリ人家ニ飼ハル  
 ルコト多シ。其ノ肉モ卵モ滋養物ノ一二ト稱セラ  
 ル。

雉ト鶉トハ野鳥ナレドモ亦雞ノ類ナリ。何レモ嘴



短ク、亦大ニ飛ブコト  
 能ハズ。雉ハ大キサ  
 大凡雞ノ如ク色ハ褐  
 色ニ細カナル黒白ノ  
 斑アリ、尾ハ長クシテ  
 直シ。鶉ハ高サ五、六  
 寸ニシテ亦褐色ニ細  
 カキ紋アリ。雉モ鶉  
 モ焼キ鳥トシテ最賞  
 美セラル。

女  
月  
太  
賣  
木  
上  
高  
第  
二

十九  
八  
大  
二  
書  
書  
未  
元  
正

鶉ハ籠ニ飼ハルルコトアリト雖、其ノ聲サノミ善  
キニアラズ。スベテ鳥ハ野山ニテ自由ニ啼クヲ聞  
クガ、處ガラ面白キナリ。

夕サレバ、

野邊ノ秋風身ニシミテ、

鶉鳴クナリ深草ノ里。

鳥肉ノ最旨キハ冬至前後ノ鴨ナリトス。鴨ハ水  
鳥ニシテ、大キサ大凡雞ノ如ク、首ハ稍長ク、腹ノ形チ  
舟底ノ如クニシテ、浮カブニ宜シク、指ノ間ニ蹼アリ

テ水ヲカキ楫トナスニ宜シ。雄鳥ノ首青ク光ルヲ  
以テ青首ト云フコトアリ。鴨ヲ飼ヒテ數代ヲ經タ  
ルモノハ鶩ニシテ、「アヒ鴨」或ハ「ヒル」ト呼ブ處アリ、形  
チ鴨ノ如クニシテ稍大キク、味ハ鴨ニ及バズ。  
雁モ亦鴨ト一類ノ水鳥ニシテ食フベク、大キサ之  
ニ數倍ス。此ノ鳥過度ナル寒暑ヲ避ケテ秋ハ南ノ  
暖國ニ往キ、春ニ至リテ北ニ歸ル。故ニ燕ナドト共  
ニ之ヲ「渡リ鳥」ト云フコトアリ。雁ノ飛ブ時ハ案内  
者先ニ立ち、ソレヨリ次第ニ並ビテ斜ニ首ヲ列チ、敢  
テ列ヲ亂サズ。其ノ聲清クアハレニシテ最愛スベ

ク、昔ヨリ詩歌ニ詠セララルルコト甚多シ。

いと女。

いと女は若狭三方郡早瀬浦佐左衛門が妻なり、孝心深くよく舅姑に仕ふ。姑は先に死し、舅年八旬に餘り、老耄して非理なることをいひの志れども、少しも逆ふ色なく給仕す。

或日いと女外より歸りたるに老人藁を散らして孫と遊ぶ。「何事をし給ふ。」と問へば、「子産むまねして遊ぶなり。」と云ふ。「さらば吾れも子を産まんとして又

藁を持ち來り、同じく戯るれば老人興に入ることを斜ならず。其の他の扱ひも推して知るべし。

一とせ深雪軒を埋むころ「茄子の羹を食はん。」と云ふ。いと心よくうけがひ、近きほとりの寺に走りて茄子の糠漬を貰ひ、水に浸して鹽を去り、羹にして進む。

又一年冬のころ鮮けき魚を求む。折りふし海荒れ、漁なければ、いかにともせんかたなけれを、さらぬさまにもてなして門に出で、とやせんかくやせんと思ひ煩らふ折り、忽足のもとに魚躍りたり。いと女

天を拜みて喜びて即調じて進めけり。隣の人見し  
には鳶魚を攫み來ていとが家の棟にとまりしが、  
がて魚を落として飛び走りたりとぞ。是れ誠に孝の  
心鬼神に通じけるならん。遂に其の行状を國候聞  
こし召し、米若干賜はり家の租をも免し給ふとぞ。

伴蒿蹊 近世時人傳。

### 新年。

新年ほを嬉しき時はなし。年の内にも餅搗き、門  
松立てなぞするほをより早くも心は春めきぬ。ま

して一夜明くれば世の人の心改まり、昨日までは月  
迫よ節季よとてかけ廻はりし人人が、今朝はにこや  
かに新年を祝ひに來るほをに、庭の雀の聲さへ何と  
なく目出たく嬉しげに聞こゆ。

元日也。

晴れて雀の物語り。

兒童は夜のまだ明けはなれぬ中より起き出でて、  
祖先の靈屋を拜し、父母を初め家内の人人に向かひ  
て新年を祝ひ、さて「たせち」として例年の雑煮を食ひ、各  
餅の数の大きに誇るもをかし。其れより外に出で





て、男は風をあげ、女は鞠  
 打ち、羽根つき、冬の日の  
 暮れ易きを惜しむ。  
 然れども新年の事は  
 ただ羽根つき、鞠打ちに  
 て盡きたるに非ず。年  
 一つ長ずれば一年だけ  
 の考へを増すべし。さ  
 れは去年の事を心の中  
 に繰り返し、善かりし事

は益勵み、惡しかりし事は改めんことを思ひ、豫め今  
 年の計を立つべし。「一年の計は元日に在り」とは是  
 れを謂ふなり。

### 烏の智。

或人海岸ニ散歩シケルニ、數百ノ鳥集マリテ、潮干  
 ノ跡ノ貝ヲ食ハント噪ギ居タリ。鳥ハ嘴ノカヲ極  
 メテ突キケレド、モ貝硬クシテ破レザリケレバ、更ニ  
 他ノ方法ヲ用ヒタリ。其ノ方法實ニ面白カリキ。  
 ソハイカニト云フニ、多クノ鳥ハ各貝ヲ口ニ啣ミ

三十乃至四十丈ノ高サニ翔リテコレヲ石ノ上ニ落  
トシ、カクシテ容易ク貝殻ヲ破リテソノ肉ヲ食ヒケ  
リ。

落ツル物ノ勢ハ高サニ隨ヒテ増ス。床ノ上一尺  
ノ高サヨリ茶碗ヲ落トセバ碎クルコト無ケレドモ、  
一間ノ高サヨリスレバ碎クルナリ。鳥ガ此ノ理ヲ  
用ヒシコソ面白ケレ。

兒童ガ用事ヲ頼マルルニ當タリ、「イカニシテモ出  
來ズ。」ト言フコト屢アリ。鳥ダニモ輕<sup>カレ</sup>シクハ思ヒ  
切ラズ、屢試ミテ後遂ニ望ミノ食物ヲ得ルナリ。マ

シテ人トシテ「到底出來ズ。」ト云フコトヤアル、屢試ミ  
スシテ直ニ廢スルコトアルベカラズ。

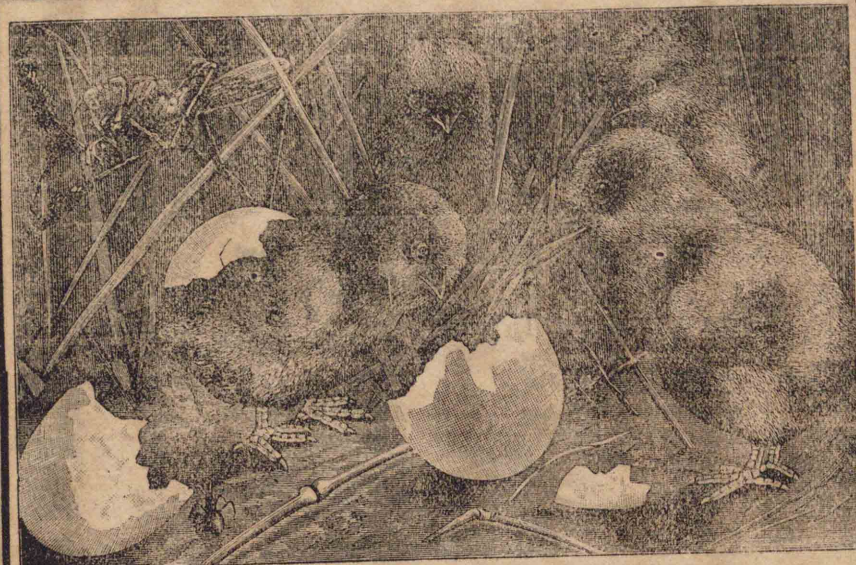
### 卵

魚の子、蟲の子、鳥の子は皆卵にて生まる。卵の中  
にて通例食物として賞せらるるは雞の卵なり。

雞の卵は所謂卵形にして、猶云へば楕圓體の一方  
太く、一方細きなり。真中に、球形なる黄身あり、又之  
を蛋黄と云ふ、其の色黄にして粘り、薄紙の如き膜之  
を包めり。黄身の周りに白身あり、之を蛋白とも云

手 丹 丸 新 六

金 法 堂 書 齋 札 式 會 社



ふ、白く透明にして亦粘り、稍厚き膜之を包み、殻又之を包みて卵の形ちを成せり。  
卵の雞となるべき子種は黄身の一部に付きて、俗に「め」と稱する所なり。黄身、白身は其の養ひにして恰も人の乳の如し。卵若し適當に温

めらるれば其のめ養ひによりて生長して雛となり、遂に殻を破りて出で来る。されば人は雛の養ひを取りて身を養ふと云ふべし。

卵は生にて食ひ、又は煮、又は焼きて食ふべし。然れども弱き人の爲には煮て半熟にせしたるもの最宜しく、生なるも宜し。極めて弱りたる病人をぞに唯黄身をのみ食はしむべし。十分に煮焼きしたるものは蛋白質凝り固まりて消化し難し。茶碗蒸し、又は卵豆腐をその如く、多量のつゆに掻き立てて蒸したるものは味美にして且消化宜し。

女 日本讀本

上篇 第二

二十五

金 法 堂 書 齋 札 式 會 社

卵は生にて日を経る時は黄身流れて漸く腐り初む。卵の善惡を見る法種種あれども、握りて其の兩端を日光又は燈光に透かし見ることを最簡便にして通例人の行ふ所なり。斯くして暗きものを除き、明かなるものを取れば大抵違ふこと無し。

卵を貯ふる法亦多しと雖、何れも手数繁くして且さまでの効なし。唯成るべく涼しく、成るべく暗き所に置くこと云ふ事は最簡便にして効ある法なり。又卵は臭氣に染み易きものなれば、汚物をよく拭ひ取り、石油其の外臭氣あるものに近づけぬやうにす

へし。

### 瞳。

目ノ玉ノ正面ニ黒目アリ、之ヲ虹彩ト云フ。黒目トハ云ヘド大抵ハ濃キ鶯色ナリ、西洋人ニハ淺黄色ノ者多シ。虹彩ノ中央ニ小サク圓キ瞳アリテ黒ク見ユ、是レ虹彩ノ穴ニシテ、内部ノ暗キガ爲ニ黒色ニ見ユルナリ。サテ外部ノ光リ此ノ穴ヨリ入ルガ故ニ人人之ニ由リテ物ノ形チヲ見ルコトヲ得。猫ノ瞳モ亦黒クシテ其ノ形チ時時ニ變ハリ、或ハ

卵ノ如ク、或ハ柿ノ核ノ如ク、甚シキハ針ノ如クニナルコトハ人ノ知ル所ナリ。若シ注意シテ見ル時ハ大抵朝夕ニハ圓ク、正午ニハ針ノ如ク、正午ヲ遠サカルニ隨ヒ瞳ノ形チ漸ク又圓クナル。故ニ昔ハ猫ノ目ヲ以テ時刻ヲ知ル道具トセシコトアリシト云フ。然レドモ、猫ヲ暗キ處ニ置ケバ正午ニモ亦瞳ノ圓キヲ見ルベシ。是レヲ以テ見レバ日光ノ最盛リナル時ハ虹彩伸ビテ瞳縮マリ、日光弱キ時ハ之ニ反スルナリ。蓋光リ強ケレバ、瞳ニ入ルコト少量ナルモ善ク物ヲ見得ヘク、多量ニ過グレバ却リテ目ヲ疲ラ

スベキガ故ニ天然ノ巧ミヲ以テ斯ク加減ヲナスナラン。

人ノ目ニモ亦瞳ノ伸縮アリ、唯猫ノ如ク著シカラサルノミ。晴天ノ日人モシ外ヨリ歸ラバ俄ニ家内ノ物ヲ見得サルコトアラン。是レ日光ノ強キ處ニテ縮マリタル瞳ガ俄ニ家内ノ弱キ光リヲ受クレバナリ。之ニ反シテ、モシ暗キ處ヨリ急ニ明カナル處ニ出ツル時ハ目ノ痛ミヲ感ズベシ。是レ暗キ處ニテ廣ガリタル瞳ニ強キ光リヲ受クレバナリ、而シテ是レ最目ヲ害スルノ仕方ナルコト明カナリ。

### 猫の類。

獸の中にて最女子に愛せらるるは猫なるべし。猫は小さく愛らしき獸にして飼ひ馴らし易く、又善く鼠を取りて臺所の害を防ぐ故に、何れの國にても飼はざる處なし。其の毛色は白、黒、斑ありて黒きを烏猫と云ひ、白に黒と茶の斑あるを三毛と云ひ、「」の字の如き斑全身に並びたるを虎猫と云ふ。猫の目は瞳の伸び縮み自由にして暗きに能く物を見るのみならず、爪は鋭くして動物を掴むに宜し

く、足のうらは和らかにして音なく、動物に忍び寄るに宜し。其の齒も鋭くして舌に刺あり、手を舐めらるれば沙にてこすらるるが如し、故に動物の肉を骨より喰ひ取り、舐め取るに便りよし。

山家に山猫と云ふものありて屢人家の臺所を荒らす。其の形ち常の猫に同じけれども、身體強大にして心猛し。常の猫は山猫を飼ひ馴らして數十代を経たるものなりと云ふ。

獅子と虎との猛く強きことは皆人の知る所なるが、其の爪、牙、舌、足等の有り様亦右に云へるが如し、故に



獅 子 虎

動物學者は是れ等を總稱して猫類の獸と云ふ。今序でを以て左に話すべし。虎は容貌猫に似て大きく恐ろしく、高さ五尺、長さ九尺に過ぐるものあり。毛は美しく輝ける黄色にして、虎猫の如き斑あり。此の物我が國には産せずして、朝鮮、支那、印度等に多

し。

獅子は大きき大凡虎の如くにして稍小さく、毛は灰色にして頭に長き鬚を被り、眼光りて且小さく、其のすむきこと言はん方なし。此の物印度等の熱國に産して、百獸の王と稱せらる。

獅子を獸の王と云はば虎を獸の大將と云はん。何れ劣らぬ猛獸にして怒りうめく時は山谷震ひ、鳥獸逃げ匿る。其の力強くして牛馬人畜を取り食ふこと猫が鼠を取るより易し。殊に子を育つる間は母の猛きこと甚しく、古へより「乳虎」なぞ云ひて恐ろ

しきものの例とせり。

猫も亦子持ちの時は怒り猛りて他の猫又は犬を  
その近よるを防ぐは人の知る所なり。多くの動物  
は子持ちの時に最猛く、人をも武器をも恐れず、身を  
捨てて子を守るなり。親の恩愛實にかくの如し。

### 義猫。

或人の許に女なる猫二つ飼ひけるに、同じ日、同じ  
時、同じやうに子二つ産みけり。五日六日ありて一  
つの母猫犬を取りけん、かいくれ見に来ざりければ、

母失へる子猫二つ「ねうねう」と啼き悲しみ、果て果て  
は飢ゑて死なんとするを、今一つなる母猫をら行  
きて其の孤子をも一つづつ啣みて己が産屋に運  
び入れ、乳房を與へ、頭より初め舐め調のへ、志となを  
取り養ひ育てけること己が生める子に聊も替らず。  
斯くて生ひ立つに隨ひ、鼠を取り来て食はするにも、  
まづ養へる子に食はせ、己が生める子には必後に食  
はせけり。「斯かるきはものさへ斯く義を知り、美  
はしき行ひをばするぞかし。」とて主いとををしみ  
飼ひけり。人として繼子憎むうたてし也。

源峯雄 鳥歌孝義傳



### 鈴木宇右衛門ノ一家。

百年許りの昔、天明年中の饑饉と云へるは奥州殊に甚しく、餓死の人道に充てり。僅に死を免れたる者は四方に流浪して食を乞ふ。出羽の鶴岡は隣國の都會なれば往く者殊に多く、鶴岡の人皆力を盡くして之を救ひけり。

中に就いて鈴木宇右衛門と云ふ人は家具、田畑を賣り拂ひて施しの米に充て、其の妻も衣服手道具を賣りて費用を助けたり。既にして施米の備へ乏し

くなりければ、妻は僅に残れる新しき衣二枚を賣らんとしけり。宇右衛門推し止めて「婦人は殊に衣服を愛する者なるに、今之をさへ賣らんと云ふは感ずるに餘りあり。然れどももし他出することもあらんに、餘りに身すぼらしきも氣の毒なれば。」と云ひけるに、妻答へけるやう「晴れ衣あればこそ他出の心も起こり、櫛簪も惜しく候へ。衣服は又も買ふべし、人の命は再買ひ難し。」とて遂に秘藏の髪飾りまでをも賣りにけり。

或日十一、二なる小娘の饑乏疲れて食を乞ふあり、

子 吟 詩 本 一 篇 録 二  
身には海布の如く破れたる單衣を着て風雪の中に  
立てり。妻は十二歳なる娘を呼びて「この子の丈は  
御身と多く違はざるべし。其の締入れ一枚脱ぎて  
んや。」と云ひければ、娘は欣然として二枚着たる締  
入れの宜しき方を一枚脱ぎて取らせけり。あはれ、  
有り難かりし一家の志しかな。

梅。

春風猶さほかへりて、折り折り雪を飛ばす中に、寒  
さを凌ぎて獨開き出で、まづ春を知らするものは梅

の花なり。最初に開くを以て梅を「花の兄」と云ふ。  
これより世は漸く春めきて、

「梅一りん、

一りんづつの暖かさ」

を加ふるなり。

梅の幹は年経れば一抱へにも餘るべく、枝ぶり節  
立ちてこはごはしけれを、花のやさしく美しきこと  
亦類ひ少し。花の直径通例一寸ばかりにて、花瓣は  
五つ、一重もあり八重もあり、色は白又は紅なるを常  
として香り甚だ佳し。



梅の花は美しき櫻に及ばざれども香の佳きことは百花之に及ぶものなし。梅の下風は更に言ふまでもなし、ただ一枝を活けたる座敷きに入るにも、匂ひのけだかく興おかしきこと限りなし。されば其の香を賞するの餘り、

梅が香を

櫻の花に匂はせて

柳の枝に咲かせてしかな。

なを云へり。

梅花の盛りは土地の寒暖によりて遅速あれども、

二月下旬、三月上旬を通例とす。別に早咲きの種類あり、寒梅、冬至梅など云ひて冬の中に開く。琉球にては梅の木至て小さく、四時葉ありて、稀に一、二輪の花を開くのみ。又奥羽の北寄りの地にては梅の花甚小さくして梅とは見えず、いかなる種類を移し植ゑても遂にはかくなる云ふ。されば梅は極めて暑き處と極めて寒き處とには相應せぬなるべし。梅は「花あり實ある」木と云ふべし。梅の實は酸きに過ぎ、生にて食ふこと少けれど、梅干しとては用ひ甚廣し。梅干しは梅の實の熟したるを取り、一、二

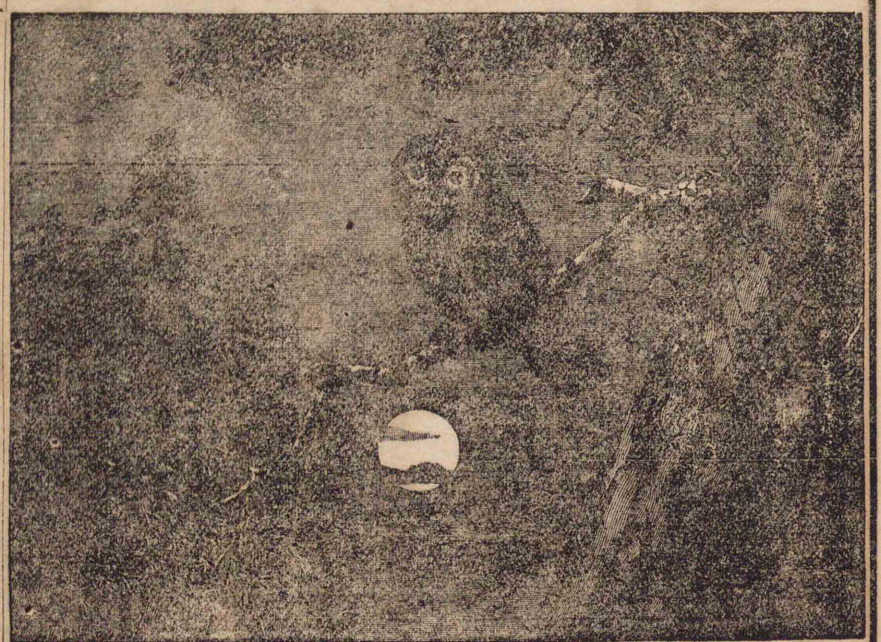
日水に漬けて後、紫蘇の葉と共に鹽に漬け、時々取り出だして日に干したるなり。斯くすれば紫蘇の汁は梅醋の爲に美しき赤色となりて梅干しを染む。梅干しは飯の菜として食へば消化をよくする功あり、昔は病人の食料には缺くべからざるものなり。梅干しは又腐敗を防ぐ効ありて、握り飯の中に入れて搦ぶ時は極暑の時も飯の腐ること少し。されば陸軍の兵糧にも此の物多く用ひらる。梅の醋は紫蘇の赤色を出だすが如く、べにの色を出だす媒として最善きものなり。故に梅の實を干

子 日 本 詩 本 一 篇 録 二

して白鳥梅と稱し、専らへにの漆用に供す。  
梅の名所は大和の月瀬を天下第一とす。山川の  
流れを夾みて幾里の間、見渡す限り皆梅ならぬはな  
し、花の色、風の匂ひ思ひやるべし。ここに産する梅  
の實は皆京都のへに漆めに用ひらる。東京の近在  
には龜井戸、杉田など梅の名所多くして皆初春の遊  
び處なり。

梟。

梟は眼の大なるを以て名高き鳥にして、ミミツク



も梟の種類なり。總へ  
て梟の類は皆動物を食  
とし、時としては小鳥を  
食ひ、時としては小き獸  
を食ひ、又或種類の者は  
魚を食ふ。されば梟の  
嘴は短く太く、強く、爪は  
長く、鋭く、動物を取るに  
利あり。鳶鷹などの如  
く肉を食とする鳥の身

女 日 本 詩 本 一 篇 録 二

金澤堂書林本三卷

子 氏 本 詩 本 一 篇 身 一 一 金 法 堂 書 齋 校 正 傳 本

體は皆かくの如し。

巢は瞳甚大きくして猫の瞳の如く伸び縮み自由ならず、晝は日光を受くること多きに過ぎて善く物を見ること能はず。故に晝は深き森に隠れ、或は朽ち木の穴を家とし、或は古き城、荒れたる家に住む。人は曰ふ、巢は雨の晴れんとするを前知し、のりすりわけ、のりすりわけと言ひて啼くと。巢は日の暮るるを時として出でて食を求む。其の物淋しき住居、暗夜の旅行、蓬蓬たる頭、大なる眼、潜めきたる羽音、物すこき啼き聲、皆人の心を寒からしむ。殊に他の鳥

の雛を取り食ふとて、昔より不仁不祥の鳥として之を忌み恐れ、詩人畫工はこれを以て夜の景色のすこさを助く。

みみづくの文。

或人ミミツクを言ひてそれを圖にして鳥を捕らへけるに、同じく殺生する友人の許よりミミツクを借りに越しけるが、其の文にミミツクを略してツクと書き、其の末に「ツク」とはミミツクのことにて候ふ、ミミツクと書き候へば文字數多く言長になり候

女 日本 賣 本 上 篇 第 二 三 十 六 金 法 堂 書 齋 校 正 傳 本

ふ故にツクと書き候ふ。と長長とこそわりけり。其れならば始めよりミミツクと書けかしと片腹痛し。文字をつづめんとして多くの文字を添へ、詞を短くせんとして却りて長くなることを知らず。

翁世間の事を観るに此の類多し。例へば物を言ふにも常に言ひつけたるやうに言へば好きを、我れ知り顔に漢語なぞにて舌短に言ひつれば人聞き取らぬ程に、亦言ひ直しなんとしていとむづかし。事を爲すにも今まで爲し來たるやうにすれば好きを、我れ賢げに理窟をもて手廻しにしつれば事支ふる

程に、又出直しなんとして跡へ履ること多し。かやうの事は物馴れぬ人のあることなり。何れもミミツクのふみに比ふべし。

其の外何事に由らず、只ありふりたるやうにすれば安らかにして事行きぬるを、宜しき仕方こそあれとて新しく仕出しぬれば、事多くむづかしくなりつつ、兼ねての用意は違ふ者なり。

室鳩巢。一殿。筆雜詩。

### 書札文字の死活

書札の文字にも死活あり、例へば一筆啓上仕候よ

り御無事、御堅固云云、私宅無恙、時候御自愛、猶期後音云云は何事もなきにも、書くも書かざるも知れぬ程の事なり。其の間に「此の間の寒氣は弊郷は海濱に氷を見、或は半月一月の早なるに、餘所には夕立ちすれども、此これには降らず」なぞ云ふは同じ寒暖を叙ぶるにも、其の地の氣色も想ひやられて書狀の文字も活かするなり。月日の末に「此の書認めたる時は雨頻に降り、杜鵑二聲三聲音づれぬ」なぞ書きたるは、愈其の時其の人の姿も思はるる様にて面白し。長さ三尋餘り有る書札にて、も死したるあり、三行四行の

書にて、も活きたるあり。

寄茶山。一筆のすさび。

其の獨を慎む。

昔盜賊多く行はれ、物を盗み、人を殺し、火を放ち、家毎に其の害を受けしことありき。或夜雨風烈しきを幸に、盜人とも例の如く諸方をうかがひありきけるに、或家の戸の透き間より火の光り漏れ出でたり。盜人とも寄りてのぞき見れば、内には若き女一人、爐に向かひて正しく坐し、粥を煮て居るなり。やがて鍋の蓋を取り、粥粒を箸にて挟み上げ、蓋の上にて



子... 今... 三十九

箸にて押し試みたり。

此の時奥の方より「いかに、粥は煮にたりや」と云ふ  
聲す。女答へて「まだ少し早く候ふ程に、今暫く待た  
せ給へ」といふ。

盗人ども之を聞き、扱は此の姫なるもの舅の粥を  
煮るとて、其の煮にを試むるに、陰ながらも禮儀を亂  
さず、清潔をむねとして、かくするなりけり。と感心し、  
其の家には遂に入らざりけり。とぞ。

されば昔の賢き人も「君子は其の獨を慎む」とて、人  
の見ぬ所にては身を行ひを慎むべきことを教へ給

へり。唯行ひの善し悪しのみならず、身體を清くし、  
衣服をつくろひ、家の内を掃除するにも、人の見及ば  
ぬ所まで心付けて、うらうへなくするを女のたしな  
みと云ふなり。徒らに髪かたちを飾り、紅、白粉をぬ  
るを以て女のたしなみと思ふべからず。

巢と鳩との話。

我が身に惡しき所ある故に、人なさけ薄くして家  
の住みにくきを「ふさはしからぬ故あるにこそ」を、  
物疑ひ晴れやらすして心を落ち付けざる事女に多

き癖なり。已れに物のさはる心あらば、何くに往きても安げなかるべき事を知らず。或譬へ物語りに、昔某と云ふ鳥の飛び來るに鳩往き會ひて曰はく、「汝何くに往くか」。某の曰はく、「我れ東の方へ移らん」とす。鳩の曰はく、「何故ぞ」。某の曰はく、「里人皆吾が啼く聲を惡むがうたてさに、住み所替へまく思ふなり」と。鳩の曰はく、「汝啼く聲を替へてこそ善からぬ、聲を得替へてあらんには、假令東に移れるとも、又汝が聲を惡まん」と。朝けりつるとかや。

中村協春。一遊樂。

子女 日本讀本。 上篇。 第二字解。

〔鋤芸〕根莠 田の草。 土地の氣 土地の精分、即養ひ。

〔よめに教訓の文〕 此の文は徳川家康公の子、忠公の妻に賜ひし文なり。

〔陶器〕長石 ボヤツ石とも云ふ、肉色を帯びたる石なり。

〔奈良〕春日形 山の如き形なり。



〔食用の鳥類〕夕されば 夕方になれば、夕音なり。 深草の里 京都の深草なり。

〔義猫〕かいくれ 消はたす、消はれ。 やをらり とろ。 志 汚き物、一と云ふに同じ。

斯かるきは 分際、これな。 うたてし こゝろな。

〔鈴木宇右衛門の一家〕饑饉 諸國穀物出来ず、食物なきことを云ふ。 鶴岡 今は内

りな。 海布 海草の名。



広島大学図書

0130449296

